

## 「ジャック・ロンドンへの旅」の企画と案内

立命館大学教授の辻井栄滋さんから

朝日21関西スクエア 2006.10

7月号(Vol.86)に寄稿させて頂いたばかりですが、この9月1～8日にわたってアメリカでも最も美しく、魅力的な地であるサンフランシスコのベイ・エリアを巡ってきましたので、この旅について記しておきたいと思います。

アメリカ作家ジャック・ロンドン(1876～1916)の研究に取り組んで早34年余りが経ちました。このところ随分と注目を集めている作家の村上春樹氏も以前から関心をお持ちのこのJ・ロンドンを少しでも多くの人たちに知ってもらいたいと、作品の翻訳や日本J・ロンドン協会の立ち上げ(1993年)あるいはその各支部読書会(京都・鹿児島・四国中国)を通じて、活動を続けてきました。さらには、1992年12月に私個人で参加者を募り「J・ロンドンへの旅」なるものを企画したのが最初で、その後毎回10名前後で上記のエリアへ出掛けるようにもなりました。今では協会主催ということで、このところほぼ毎年全国各地から参加され、大きな感動をもって帰国してもらっています。そして今回で、もう7度目の旅を終えたところです。

作家や作品の舞台をより深く知るためには、現地に赴くことが欠かせません。100年の時を越えての旅ですので、随分と変貌しているところもありますが、往時の姿をそのまま残しているところも結構あるものです。

例えば、今回の旅程から少し拾ってみましょう。J・ロンドン生誕の地(サンフランシスコ市内) 大農園(ソノーマ郡グレン・エレン) ピードモント丘陵とメリット湖(共にオークランド市)等です。中でも、大農園(「ビューティ・ランチ」)は抜群です。私自身は、皆さんと、あるいは1人で、都合20回ぐらいこの1400エーカーに及ぶ大農園を歩いていますが、何度訪ねても感銘を受け、大自然の懐に抱かれているとの思いに癒やされます。地道を約4時間近くかけて歩くのです(時々一服しながら)。それも、雲1つない真っ青な大空の下、往時を思い起こさせるユーカリの林・3つの家畜小屋・コティッジと呼ばれる住居・豚宮殿・2本のサイロ・アメリカ杉の大きな森・「レイク」と呼ばれる池・「幸せの壁の家」という記念館・ロンドン自身の墓・入居を果たせず炎上した「狼城」と呼ばれた邸宅の廃墟等々、その広大な農園には見所がいっぱいです。終日でも遠近を問わずやって来る人たちと何度も行き交うのも別の楽しみです。

いつ訪ねても様々な思いが交錯しますが、最も心打たれるのは、上記のアメリカ杉の大きな森でしょう。中には雷に打たれて焼け焦げ、洞の出来た木がいくつも見あたりますが、その根元からはまた新たな若杉が育っています。日差しが届かないほど何十メートルにもわたって天空に向かって伸びる大木の鬱蒼とした森の中を歩くたびに、自然環境保護の観点から、よくぞこの地を残してくれたものだと感謝せざるを得なくなります。今は、カリフォルニア州立史跡公園として維持管理されており、いついつまでも残してもらいたいものの1つです。

そして、私の体力の続く限り、この素晴らしいサンフランシスコのベイ・エリアに皆さんを案内したと考えています。